李白と科挙

高津　孝

本論考は、李白と科挙という問題について、共感という観点から検討を加えるものである。李白は中国を代表する著名な詩人であるが、その生涯については不明な点が多い。これまでも様々な研究が行われてきたが、解決されざる点はなお数多い。本論考は、李白の心理的側面について探究するものである。社会的存在としての区分「士」は、社会的にも心理的にも曖昧さを含む概念であり、したがって、この論考は、事実の確定が困難な事柄に対し、不確定な事実に基づいて、ある程度の議論を進めねばならず、蓋然的の高い議論にならざるを得ない。すなわち、本論考は、問題の存在とそれを検討することの限界が明らかになることを目的としているのである。

一　李白と科挙という問題

李白と科挙の関係については、古くから議論されているテーマである。これはよく知られているように李白の一族が商業と密接な関係を持っていたという事実と深く関係している。現在の一般的理解としては、例えば、金文京『李白　漂泊の詩人　その夢と現実』第Ⅱ部第一章・四川時代「李白と科挙―商人の官界進出」[1]によれば、「李白は科挙を受けたことはなかったし、また受けようとした形跡もまったくない」という事実の指摘を行い、そこから、「（根本的な原因は）李白には科挙を受ける資格がなかったことであると考えられる」と推測している。その根拠となる事実としては、唐代の商人身分についての次のような資料が挙げられる。

『大唐六典』巻二・尚書吏部「凡官人身及同居大功已以上親、自執工商、家専其業、皆不得入仕」（すべての官人は、本人自身および同居する大功以上の親族が、みずから商工業に携わったり、家業として商工業を行うものは、すべて仕官できない。）

『大唐六典』巻三「工商之家不得預於士」（商工業を家業とするものは、官僚およびその予備軍「士」となることはできない。）

『大唐六典』は、『周礼』の六官の制にならい，唐の官職設置の体系を明示した書物で、開元二六年（七三八）に完成した。当時の行政法規を引用しており、玄宗朝の「士」や科挙に関する法令を知ることができる。上記の資料は、唐代では「入仕」（官職につく）することで「士」（官僚およびその予備軍）という身分になるが、商工業者は「士」になれない事を明示する。この他、『唐律疏義』巻二五・詐偽律九にも、「又依選挙令。官人身及同居大功以上親。自執工商。家専其業者。不得仕」とあり、『新唐書』選挙志・下にも「刑家之子、工賈異類及假名承偽、隠冒升降者有罰」という記載があり、工商に携わる者は官職から排除された存在であった。『唐律疏義』は、唐の高宗・永徽三年（六五二）に編纂された唐律（唐代の刑法典）注釈書で、永徽四年（六五三）に頒布された後、開元二五年（七三七）の改訂を経て宋代に編集された法典で、唐代の法令の骨格を示すものである。したがって、当時の法律的規定を勘案すると、商業の民であった、あるいは一族が商業の民であった李白にはそもそも科挙の受験資格がなかったということになる。ただし、この法令が唐代を通じて厳格に施行されたかというと、そうではない例が唐末になると出現している[2]。

このような「李白と科挙」の問題化について、研究史的展望を行った論

---

[1] 金文京『李白　漂泊の詩人　その夢と現実』（岩波書店、二〇一二年一〇月）

[2] 傅璇琮『唐代科挙与文学』（陝西人民出版社、一九八六年一〇月）第八章・進士出身与地区・二・（二）出身于工商市井之家に、陳会（開成末・会昌初進士、酒家）、畢諴（八〇二―八六四）（大和中進士、塩商の子）、常修（咸通六年進士、塩

文として下定雅弘「李白の詩をどう読むか　―科挙を受験できなかった詩人の傲慢と悲哀―」[3]がある。下定論文によれば、「李白はなぜ科挙を受験しなかったのか」という問いを問題化し提起したのは、イギリスの東洋学者アーサー・ウェイリーである。アーサー・ウェイリー『李白』[4]によれば、同時代の著名な詩人と比べ、受験もせず、正規の官に就かなかったのは李白だけであること、それゆえ、特異な人物であること、科挙における進士の試験は詩歌、儒家の経典、政治論を受験科目とするもので、李白自身、合格の見込みは低いと見ていた点、および、推薦人や保証人を確保できなかった点を指摘している。ウェイリー以前の伝統的見解としては、王瑤『李白』（上海人民出版社、一九五四年）の「受験は眼中になかった」説、林庚『詩人李白』（上海古典文学出版社、一九五六年）の「官途に恋々としない」説、王運熙『李白研究』（作家出版社、一九六二年）の「理想は布衣から一挙に卿相になること」説が一般的であった。すなわち、基本的に科挙問題を重要視していないというものである。ここで、新説が現れる。筧久美子「郭沫若「李白与杜甫」書評」[5]である。また、同じ見解は、小川環樹編『唐代の詩人―その伝記』[6]の小川環樹「序説」、筧久美子「李白伝」にも見られる。そこでは、李白に受験資格がなかった事を指摘し、その根拠に、①祖先が罪人として流謫されており、同時代資料（李陽冰「草堂集序」など）にこうした記載があること、②家業が商業であったこと、の二点を挙げる。この新説に対して、下定論文は、李白解釈に大きな変化の生じた点を指摘し、高く評価する。小川環樹は、科挙受験資格無しという点から、李白の深い劣等感の存在を論じ、一方、孟浩然、杜甫の劣等感、挫折感よりもいっそうその悩みは深かった点を指摘する。こうした指摘は、吉川幸次郎による「情熱の詩人」「剛毅な人間の代表」としての李白観による、李白の寂寥を一般的な「推移の悲哀」とする解釈、すなわち、武部利男も吉川と同様で、李白「月下独酌」に寂しさ切なさを読まない解釈に大きな変更を迫るものとするのである。また、下定論文は、李白を剛毅で自由奔放とする既存の解釈からは、李白の「愁」は重みを持たないものとなるが、李白に出自にまつわる問題が存在したとする理解に立つと、李白詩に対する読みは陰翳を帯び、変化と奥行きに富むことになる点を指摘し、「李白を情熱の詩人・幻想詩人と見、李白の詩を自由奔放・剛毅・華麗・幻想性といった面からのみ読むことは、もはや過去となった」とする。

著者は、このような李白理解が一般的であると思っていたが、最近、それを否定する李白研究書が出版された。乾源俊『生成する李白像』[7]である。本書では、第七章「李白登科考」[8]で、李白科挙合格説が提起される。乾論文では、李白が科挙を受験しなかった説「不応試説」を三つに分類する。第一は、小川説の範囲内にあるもので、ウェイリー、小川環樹、松浦友久、閻琦、傅紹良、喬長阜が代表的提唱者である。第二は、「終南捷径」説で、進士でなくとも玄宗に招かれるとする説である。詹鍈が主張する。第三は、「終南捷径」説を敷衍したもので、「天子直接の徴召」説で、熊篤が提起する。熊篤説は、熊篤「李白為何不赴科挙考論」[9]で提起されたもので、唐代の科挙は三種あり、①が常選で、進士、明経等、②が制科で、皇帝が臨時に設定したもの、③が上書拝官で、著書を天子に献上して官職を拝領するもの、と分類し、これ以外の任官として「終南捷径」があり、天子の直

商の子）、顧雲（咸通一五年進士、塩商の子）を挙げている。畢諴は懿宗朝で宰相になっている。

[3] 下定雅弘「李白の詩をどう読むか　―科挙を受験できなかった詩人の傲慢と悲哀―」（Novitas, 一九九三年三月、帝塚山学院大学国際文化学会）

[4] アーサー・ウェイリー『李白』（岩波新書、一九七三年、小川環樹、栗山稔訳。原著一九五〇年）

[5] 筧久美子「郭沫若「李白与杜甫」書評」（中国文学報・二三、一九七二年）

[6] 小川環樹編『唐代の詩人―その伝記』（大修館書店、一九七五年）

[7] 乾源俊『生成する李白像』（研文出版、二〇二〇年）

[8] 初出『文芸論叢』（大谷大学文芸学会）六二号、二〇〇四年

[9] 熊篤「李白為何不赴科挙考論」（『唐代文学研究年鑑』一九九七年、初出『重慶師範学院学報』一九九六年第一期）

接徴集、特別任用によるものと定義する。この「終南捷径」は、すでに四二歳であった李白にとって科挙より魅力的であり、かつ、家柄、戸籍を詮索されないという利点があったとする。

乾源俊説は、「実質的に熊篤の所説に近い」とする李白科挙合格説である。乾によれば、「天子直接の徴召」は「制科の一科目」で、「科挙制度の一環をなすもの」とされる。さらに、天宝元年に「高道」という制科があったとし、李白は「高道」科で合格したとするものである。しかしながら、『唐会要』巻七六・制科挙や『雲麓漫鈔』巻六・制科一覧には、天宝元年「高道」科は見えていない。また乾説では、天宝元年「高道」科の存在した根拠に岑参の詩題「宿關西客舍寄東山嚴許二山人時天寶初七月三日在内學見有高道舉徴」[10]を挙げるが、清・徐松『登科記考』巻九はこれを道挙とする。したがって、この説は十分な根拠があるとはみなし難い。

また、李白は、天宝元年（七四二）秋に翰林待詔となり、天宝三年（七四四）春に朝廷から追放（理由は諸説あり不明）されているが、この「翰林待詔」とは、皇帝のプライベートな秘書であり、臨時の呼び出しに応じて皇帝に奉仕する役職である。したがって。科挙や制科の合格者が、朝廷で政治に関与したり、地方官となって地方政治に関与したりするものとは大きく異なる。『旧唐書』職官二・翰林院には、「其待詔者，有詞學、經術、合鍊、僧道、卜祝、術藝、書奕，各別院以廩之，日晚而退。其所重者詞學。」とあり、詩人としての能力が発揮される「詞學」が特に重んぜられたとはいうが、それは政治の表舞台に立つものではない。さらに、魏顥「李翰林集序」[11]（七六一年以降の作）には「年五十余、尚無禄位」とあり、同時代人の証言として、五十数歳の時点でこれまで「禄位」（俸給と官位）を有したことはなく、正式の官位に就いたことはないとする。したがって、李白は科挙を受けて「士」になってはいないと判断されるのである。すなわち、李白は科挙システム、士人システムの外にいたと考えざるをえず、無理に科挙システムに組み込む必要はない。

二　道挙

道挙とは、科挙の一形態であり、道教文献を試験科目とするものである。藤善真澄「官吏登用における道挙とその意義」[12]によれば、玄宗朝の開元二九年（七四一）正月、洛陽、長安に崇玄学を置き、博士、助教各一人を配置した。天宝二年（七四三）、崇玄学を崇玄館に昇格させ、学生を両京（長安、洛陽）で二百名とした。学生の資格は国子学に等しく、官品高きものの子弟に限定した。学生は礼部に推薦され、基本的には道挙を受験した。郷貢（地方政府推薦の受験生）も存在したらしい。崇玄館の設置が道挙の実施の前提であり、教育施設で道教思想、教理を教育後、優秀なものに道挙の受験資格を与えたということであろう。道挙の合格者は、道教関係の官職に着くようなイメージがあるが、実際は普通の地方官に任じられており、一般の進士と同じである。

『中国考試通史』[13]第一巻（先秦至隋唐五代）第一四章によれば、開元二九年（七四一）の最初の道挙は慣例を破った点が二点あったことを指摘する。すなわち、春ではなく秋に行われたこと、皇帝自ら行うものであったこと（宋代以降の殿試と同じ）、である。この時の合格者には、姚子彦、

---

10 唐・岑参撰、廖立箋注『岑嘉州詩箋注』（中華書局、二〇〇四年、中國古典文學基本叢書）巻三。廖立は、「天寶初」は宋本にないこと、題名は『文苑英華』に依ったこと、『文苑英華』では「内」字を欠くこと、と指摘する。また、「高道舉徴」は天宝元年の道挙をいうとする。

11 『李太白全集』（中華書局、一九七七年／一九九〇年）巻三十一。

12 藤善真澄「官吏登用における道挙とその意義」（史林五一―六、一九六八年）。

13 楊学為総主編『中国考試通史』全五巻（首都師範大学出版社、二〇〇四年）。

元載、靳能、宋少貞、馮子華等がいた[14]。また、『唐闕史』巻下・太清宮玉石像に「明皇朝，崇尚玄元聖主之教，故以道舉入仕者歲歲有之」とあることから、毎年行われたようである。

李白「送于十八應四子舉落第還嵩山」詩は、李白の詩中で、科挙に言及する詩歌の一つで、天宝三年（七四四）春の作と推定されている[15]。李白は、天宝元年（七四二）秋に翰林待詔に任ぜられ、天宝三年（七四四）春に朝廷から追放（理由は諸説あり不明）されたので、この作品は彼が朝廷を追われる直前の作品と見なされている。

送于十八應四子舉落第還嵩山　于十八の四子舉に應ずるも落第して嵩山に還るを送る（于某（排行が十八）どのが、道挙（受験科目が四子（『老子』『荘子』『文子』『列子』））を受験し落第して嵩山に帰るのを見送る。）

吾祖吹橐籥、吾が祖　橐籥を吹き，
天人信森羅。天人　信（まこと）に森羅。
歸根復太素、根に歸し　太素に復し，
羣動熙元和。群動　元和を熙（やは）らぐ。
炎炎四真人、炎炎たる四真人，
摛辯若濤波。摛辯　濤波の若し。
交流無時寂、交流　時として寂なるは無く，
楊墨日成科。楊墨　日に科を成す。
夫子聞洛誦、夫子　洛誦に聞く，
誇才才故多。才を誇る　才固（もと）多し。
為金好踊躍、金と為って　好んで踴躍，
久客方蹉跎。久客　方（まさ）に蹉跎たり。
道可束賣之、道は束（つか）ねて之を賣るべく，
五寶溢山河。五寶　山河に溢（あふ）る。
勸君還嵩丘、君に勸む　嵩丘に還り，
開酌眄庭柯。開酌　庭柯を盼（かへり）みよ。
三花如未落、三花　如（もし）未だ落ちざらば，
乘興一來過。興に乗じて　一たび來り過ぎらん。

（わが祖先の老子の教えはは、ふいごを吹くように天下に広まり、道を体得した人は数多い。（道教の教えでは）本性に立ち帰り、本質の原初を回復するならば、万物の陰陽和合を調和させられる。荘子（南華真人），文子（通玄真人），列子（沖虚真人），庚桑子（洞虚真人）の優れた四真人の思想は、波濤のように天下に広がった。その思想は、河水が合流しつつ巨大な流れになるように止むことなく展開し、四子の書は今日、道教の科挙の試験科目となった。于十八どのは、道教の教えを、暗唱し身につけ、その才能を自負し、その才能は多岐にわたった。今、天地の定めに逆らって名剣になろうとした金属の塊のように、道教の科挙に合格して出世することを願い、長安の都に勇んでやって来たが、長期間、旅人として長安に滞在しても、合格は叶わず落第することになった。道教の真理は、束ねて売るほどどこにでも存在する。道徳の基本である五つの宝も山河に溢れている。君に勧める、嵩山に帰られ、酒を飲みながら庭の木々の枝振りを見るように。もし、嵩山の、年に三回花開くという三花樹がまだ花を散らしていないならば、私は興に乗じてあなたのところを訪ねていこう。）

著者は、唐代の科挙落第を扱った詩歌を慰めの言語行為という観点から分析したが[16]、慰めの言語行為は次の五つの分類が可能である。（一）共

---

[14] 清・徐松『登科記考』巻八（中華書局、一九八四年）。
[15] 詹鍈『李白全集校注彙釈集評』（百花文藝出版社、一九九六年）巻一五。
[16] 高津孝「唐代の下第詩―他者への慰めという観点から―」（九州中国学会報・五九、二〇二一年五月）、高津孝「唐代の下第詩―自己慰撫という観点から―」

感（二）視点提示（三）忠告（四）激励（五）援助、である。これを上記の李白詩に当てはめると、道挙の落第に対して、李白は四つの慰めの言語行為を行ったことが分かる。

（一）共感：詩全体。

（二）視点提示：道教の真理は、どこにでも存在する。

（三）忠告：運命に従えとのアドバイス。

（五）援助：私のところを訪ねてきてくれ。

唐王朝は、李姓であることから、道教教団は唐王朝を老子（李耳）の子孫であると主張している。ここでも李白は李姓であることで自らを老子の子孫とすることから詩を始める。しかし、李白が科挙合格者の立場からこの詩を創作しているようには内容からは判断できない。むしろ、科挙に基づく立身出世を離れた境地を推奨しており、彼の存在自体が科挙とは別の人生を示すものであるように見える。

三　士とは何か

上述のように、唐代末期になると、商人であっても科挙に合格するものが出現してくる。したがって、科挙受験資格における商人の排除規定は空文化ないしは弱化していたことになる。ではこのような事態は、どのような社会的背景を有するのか。呉宗国[17]によれば、唐代後期、工業商業活動の範囲が拡大し、政府が設置した「市」内に収まるものではなくなってきたこと、かつ、経営者の中には、多くの元来農民であったものが存在し、「市籍」を有する工人・商人のみではなくなったこと、また、地方経済の発展に従って、多くの「草市」が出現し、一部は固定化した集鎮へと発展したこと、さらに、交通の発達によって駅亭付近に農民経営の店舗が出現したこと、交易や手工業に従事する農民も多かったことを指摘し、経済の発展と社会の分業化の拡大によって、農民が農業から分離ないしは半分離し、工業商業活動に従事するようになったことを指摘する。加えて、多くの官僚が商業に従事し、士農工商を厳格に区分することが出来なくなったことを言う。すなわち、唐代後半期には士農工商を前提とする「士」の境界線が曖昧になってきたのである。

また、呉宗国[18]によれば、唐代後半期には、「士族」の含意に大きな変化が生じたという。以下、呉宗国の見解を纏めると、唐王朝は建国後、隋朝の制度を継承し、王朝官僚に様々な特権を付与する制度を定めた。中でも五品が重要な境界線となっており、三品以上の「親貴」、五品以上の「通貴」には「門蔭」（父祖等の功績・官職によって、官職に就くことができる制度）、同居する一族への免税特権が与えられた。六品以上は本人への免税特権のみである。こうした政治的経済的特権は、現任官職と関連しており、三代以上の祖先の官職・門地とは無関係であった。唐代初期はなお門閥意識と制度が強い影響力を有したが、高宗朝に「皇朝得五品官者、皆升士流」（『旧唐書』李義府伝）と規定され、門閥観念は徹底して否定され、現任の官職にのみよって「士流」への所属が決まることになった。官品の高下が門地の高下に取って代わり、官民の区分は次第に「士族」「庶民」の区分に取って代わることになった。こうして新しい士族観念が次第に形成されていった。唐代前期の法令中の「士」には、特定の含意があった。『大唐六典』[19]には「凡習学文武者為士」とあり、文を学んだ者も武術を学んだ者も「士」と称することができたが、この範囲は次第に狭まり、後には主として読書人（学識ある人）を指すようになった。梁粛は、開元年間（七一三―七四

（日本宋代文學學會報・八、二〇二一年一二月）

17 呉宗国『唐代科挙制度研究』（遼寧大学出版社、一九九七年）第十三章・唐後期応挙及第範囲的拡大・第一節・階層的拡大。

18 呉宗国『唐代科挙制度研究』第十四章・科挙与社会等級再編成・第二節・士族含義的変化。

19 『大唐六典』巻二。

一）に「士有不由文学而進、談者所恥」[20]と述べ、科挙において文学試験で合格した進士が尊ばれたことを示しており、武人は完全に排除されている。さらに、貞元一七年（八〇一）に完成した杜佑『通典』[21]には、「自是士族所趨向、惟明経、進士二科而已」とあり、この士族は読書人という集団をさすものである。この他、『旧唐書』劉闢伝の元和元年（八〇六）詔「劉闢生於士族」は、進士出身を指すと判断され、「太和七年（八三三）冊皇太子徳音」[22]においては、百官、士族を包括して「士大夫」と呼び、士族を公卿、百官に対するものとしており、この「士大夫」は主として科挙の参加資格を有する布衣を指すと考えられる。また、『旧唐書』巻一四七・杜悰伝、巻一六八・独孤郁伝によると、「士族之家」は、貴族と武臣から区別された科挙官僚を指す。これら用例の検討を経て、唐朝後期には、士族とは科挙受験を目指す布衣の家、進士出身者の家族、科挙官僚を指し、明確な法律的定義はないが、どの場合においても、魏晋南北朝時代の旧士族やその子孫を指すものではなく、新しく意義が付与されていたことを示す。一般的には、士族とは、主として科挙を経て官職についた者、あるいは科挙受験を目指すもののいる家族を指すのである。

唐朝では科挙制度の成立によって、六朝以来の門閥貴族が徐々に没落していく過程をたどる。それに応じて「士」及び「士族」の概念も、唐朝初期における門閥貴族を指す意味から、唐朝後期には科挙官僚及びその予備軍としての読書人を指すように変化する。また、唐朝初期に明確であった士農工商という階層区分も、社会経済の発展に従って、唐朝後期にはその区分が曖昧になり、「士」の境界線が揺らいでくることになった。李白の生きた盛唐の時代は、上記のような「士」の意味変化の過渡期にあたる。おそらく、盛唐時代には、「士」は官僚層およびその予備軍の読書人を意味し、かつ「士」と「商」との区別は明確であったと推定される。したがって、李白は、「商」でありながら読書人であるという曖昧な社会的位置にあったと推定されるのである。

四　科挙受験者の親戚

李白の親戚には科挙受験者がいる。従甥（父方の従姉妹の息子）の高鎮である。高鎮に与えた詩は二首残されており、その一首「醉後　従甥の高鎮に贈る」には、「君は進士と爲りて進むを得ず、我は秋霜を被りて旅鬢を生ず。」（あなたは科挙の進士科を受験したが、合格できず、わたしは旅の途中、秋の霜に遭遇して鬢髪が真っ白になった。）という。「進士」は地方政府から推薦され、科挙の受験資格を得たものを言う。合格すると「前進士」となる[23]。父方の従姉妹である李氏の嫁いだ高家は商業従事者ではなかったのであろう。この詩は、天宝七年（七四八）の作品とされている。李白が長安宮廷を追放された後で、長江下流域を行き来し、春に金陵、夏に揚州、秋に霍山（安徽・六安）、冬に廬江（安徽）に居たとされる。季節は春であるので、金陵で高鎮に出会い、この詩を送ったと推定されている。

醉後贈従甥高鎮[24]　醉後　従甥の高鎮に贈る

馬上相逢揖馬鞭，客中相見客中憐。　馬上相逢ふて馬鞭を揖し，客中相見て客中に憐む。

欲邀擊筑悲歌飲，正値傾家無酒錢。　擊筑悲歌を邀（むか）へて飲まんと欲するに，正に値ふ　家を傾けて酒錢無きに。

江東風光不借人，枉殺落花空自春。　江東の風光人に借さず，枉殺す　落花空しく自づから春なるを。

---

20 『全唐文』巻五二〇・梁肅「侍御史攝御史中丞贈尚書戸部侍郎李公墓誌銘」。
21 『通典』巻十五・選挙三・歴代制下。
22 『唐大詔令集』巻二九。
23 清 梁章鉅『稱謂錄』學政「唐代有舉人、進士之名，特為不第者之通稱……及第者及稱前進士。
24 『李太白全集』巻一〇。

黄金逐手快意盡，昨日破産今朝貧。
産を破って今朝貧なり。
丈夫何事空嘯傲，不如燒却頭上巾。
頭上の巾を燒却せんには[25]。
君爲進士不得進，我被秋霜生旅鬢。
秋霜を被りて旅鬢に生ず。
時清不及英豪人，三尺童兒唾木廉藺。
の童兒　廉藺を唾す。
匣中盤劒裝鰆魚，閑在腰間未用渠。
在って未だ渠（かれ）を用ゐず。
且將換酒與君醉，醉歸託宿吳專諸。
して吳の專諸に託宿せんとす。

（高鎮くんとは、旅の途中、馬上で出会い、鞭を手に挨拶を交わしたが、旅先でお会いすることになったことを残念に思う。高漸離が荊軻と酒を飲む時、筑を打ち鳴らして音楽を奏で、歌を歌って酒を飲んだというが、私はちょうど家産を蕩尽して酒代に欠く始末。江南の春景色は人のために留まってはくれず、あっという間に過ぎ去っていく、いまここで痛飲して楽しまなければ、無駄に春は過ぎ去り落花舞う素晴らしい季節は終わってしまう。これまで黄金が手に入ってもすぐさま使い果たし、昨日破産し今日は貧乏暮らしだ。男たるものどうして酒無しでむなしく放歌長嘯しようか。

黄金　手を逐ふて快意に盡き，昨日
丈夫何事ぞ空しく嘯傲する，如かず
君は進士と爲るも進むを得ず，我は
時清くして英豪人に及ばず，三尺
匣中の盤劒鰆魚を裝ひ，閑に腰間に
且つ將に酒に換へて君と醉ひ，醉歸

25 『陶淵明集』（中華書局、一九七九年）巻三・飲酒・第二十「若復不快飲，空負頭上巾。」『宋書』巻九三・隱逸・陶潛伝「郡將候潛，値其酒熟，取頭上葛巾漉酒，畢，還復著之。」

それくらいなら頭の頭巾を燃やしてしまおう（陶淵明は酒を濾すのに頭巾を使ったというが、何の役にも立たないのだから燃やしてしまおう）。あなたは科挙の進士科を受験したが、合格できず、わたしは旅の途中、秋の霜に遭遇して鬢髪が真っ白になった。太平の世には英雄、豪傑は徴用されず、戦国時代の趙の英雄である廉頗と藺相如も子供に軽蔑される。我が家には鮫皮の鞘に納めた剣が箱に収められてあり、いま腰に静かに下げているが使用する機会もない。したがって、しばし、この剣を酒代にしてあなたと大いに酔っ払い、春秋時代の呉の刺客であった專諸のような侠気ある人の家に酔っ払って帰ることとしよう。）

この詩は、旅先で親戚の高鎮に偶然出会い、一緒に酒盛りをした後、高鎮に贈った詩である。高鎮は科挙の進士科を受験したが合格できずにいることを慰める内容ともなっている。（一）相手への共感は詩全体に現れ、特に強調されるのは（二）視点転換で、行く春を逃さず今楽しもうという視点の提示である。しかし、落第という彼自身の問題に対しては、「時清くして英豪人に及ばず」といい、太平の世であるから、英雄豪傑は無用の存在となるのだという今一つの（三）視点転換を示している。「英豪人」には李白自身も含まれるであろうが、科挙落第という高鎮の経験自体に自分を重ねることはなく、距離を置いているように思えるのは、やはり李白が科挙制度の外にいた人物であるからと考えられる。「君爲進士不得進，我被秋霜生旅鬢」に見られるように、科挙に合格できない高鎮と対になるのは、旅先で老いる李白であり、科挙を通じて出世を志向する高鎮的世界からは一歩離れたところに李白はいるのである。

五　李白の自己認識

李白は自らを社会的存在としてどのように認識していたのか、李白は「士」をどのように考えていたのか、という点が当然問うべき問題として出てくる。本論文で問題にしたのは、唐代の行政文書や法令に出現する、科挙の受験資格に関連した社会階層を意味する「士」である。それは唐代における社会的経済的変化に対応して意味が変化している概念であり、特定の時期における意味を確定的には示し難い。さらに、李白の詩歌中に出現する「士」は、こうした社会的階層を示す「士」とは異なり、一般的に「男子の美称」として熟語成分の一要素として機能しているものがほとんどであるとは考えられるが、そこに読書人の通称としての「士」の意識が全くないとは言えない。以下、李白の自己認識を「士」で表現されたものについて見ていく。まず、「搜韻」サイトを用いて、李白詩中から「士」を検索すると、九三ヶ所ヒットする。単独の「士」のほか、壮士、窮士、経済士、侯門士、三玄士、司士、士卒、醜士、進士、大士、美（一作英）士、力士、烈士、曠士、俠士、最下士、下士、義士、居士、好士、節士、達士、猛士、虎士、高士、方士、通方士、國士、戰士、豪士、處士、道士、壮士、世上士、青雲士が現れる。最も有名なものが、次の詩である。

答湖州迦葉司馬問白是何人　湖州の迦葉司馬の白は是れ何人ぞと問ふに答ふ[26]

青蓮居士謫仙人，酒肆藏名三十春。　青蓮居士謫仙人，酒肆名を藏す三十春。

湖州司馬何須問，金粟如來是後身。　湖州司馬何ぞ問ふを須ゐん，金粟如來是れ後身。

戯れの作ではあるが、自らを「青蓮居士謫仙人」と名乗っている。道教的要素と仏教的要素の混じった戯作であるが、「居士」という有徳で官職についていない人物という自己像を示した詩である。また、「草創大還贈柳官迪」詩[27]では「抑予是何者，身在方士格（抑も予は是れ何者ぞ，身は方士の格に在り）」と、金丹の製造を行う方術の士と自称している。これも当時の一般的な「士」の階層から離れた人物像を提示したものとなっている。この他、自己を「壮士」（勇猛果敢な人物）として提示する詩が八首ある。「梁甫吟」「豳歌行上新平長史兄粲」「書懷贈南陵常贊府」「淮陰書懷寄王宋城」「遊敬亭寄崔侍御」「登黃山凌歊台送族弟溧陽尉濟充泛舟赴華陰」「五月東魯行答汶上翁」「酬崔五郎中」[28]である。また、「国士」（国家における傑出した人材）と自認する「下途歸石門舊居」詩[29]、「豪士」（豪放任俠の士）と称する「金陵鳳凰台置酒」詩[30]がある。「贈宣城趙太守悅」詩[31]における「醜士」（身分卑しく醜い人）は謙遜の辞であろう。「送楊燕之東魯」詩[32]における「侯門士」は、「我固侯門士，謬登聖主筵」（私は元々諸侯の門を官職を求めて訪ね歩く人物であったが、間違って宮廷にお仕えすることになった）と、長安での宮廷生活以前の自分を表現しているものである。基本的には「官職についていない優れた人材」というのが李白の自己表現であったように考えられる。すなわち、「士」（読書人）であり、「士」（優れた人材）という自己認識もありながら、社会的範疇である「士」から疎外された人物が李白であったということになる。

ここで、同時代のもう一人の著名な詩人杜甫に目を転じてみよう。杜甫には李白とは異なる「士」への共感が見られる。杜甫における「士」は、

26 『李太白全集』巻十九。
27 『李太白全集』巻十。
28 それぞれ、『李太白全集』巻三、七、十二、十三、十四、十八、十九、十九。
29 『李太白全集』巻二十二。
30 『李太白全集』巻二十。
31 『李太白全集』巻十二。
32 『李太白全集』巻十七。

社会的範疇としての「士」への顕著な共感が見られる。これは言い換えると、自分を社会的範疇としての「士」に属するとし、「士」以外を共感の枠外に置く行為となるのである。たとえば、杜甫「春望」[33]の最後の二句「白頭搔更短、渾欲不勝簪」は、官吏として唐王朝に仕えることの出来なくなったことを嘆くものであり、自らを社会的範疇としての「士」の立場に置いての表現である。これは当時の官僚階層出身の士族層にとっては当たり前の認識であった。杜甫「茅屋為秋風所破歌」[34]の最終句である「安得廣廈千萬間、大庇天下寒士俱歡顔、風雨不動安如山」も、自らの平安を差し置いて、「天下の寒士」の安寧を願うものである。無論、「天下の寒士」の一部として自らがそこに含まれており、彼の共感の対象が官僚階層へと連なる「士」の内部に留まることを示している。一方、李白は異なる。唐代の著名な詩人のほとんどが、官職へと連なる「士」という階層内の人であったことを考慮すると、李白は極めて特異な詩人、特別な存在の人物であったと考えざるを得ないのである。

---

[33] 『杜詩詳註』（中華書局、一九七九年）巻四。

[34] 『杜詩詳註』巻一〇。